

第2章 学校管理職の役割

ここでは、管理職の役割について考えます。まずは、外国人児童生徒が学校に編入学したら、管理職(校長、副校長・教頭)は何をしたらよいかを簡単に図で示しておきます。

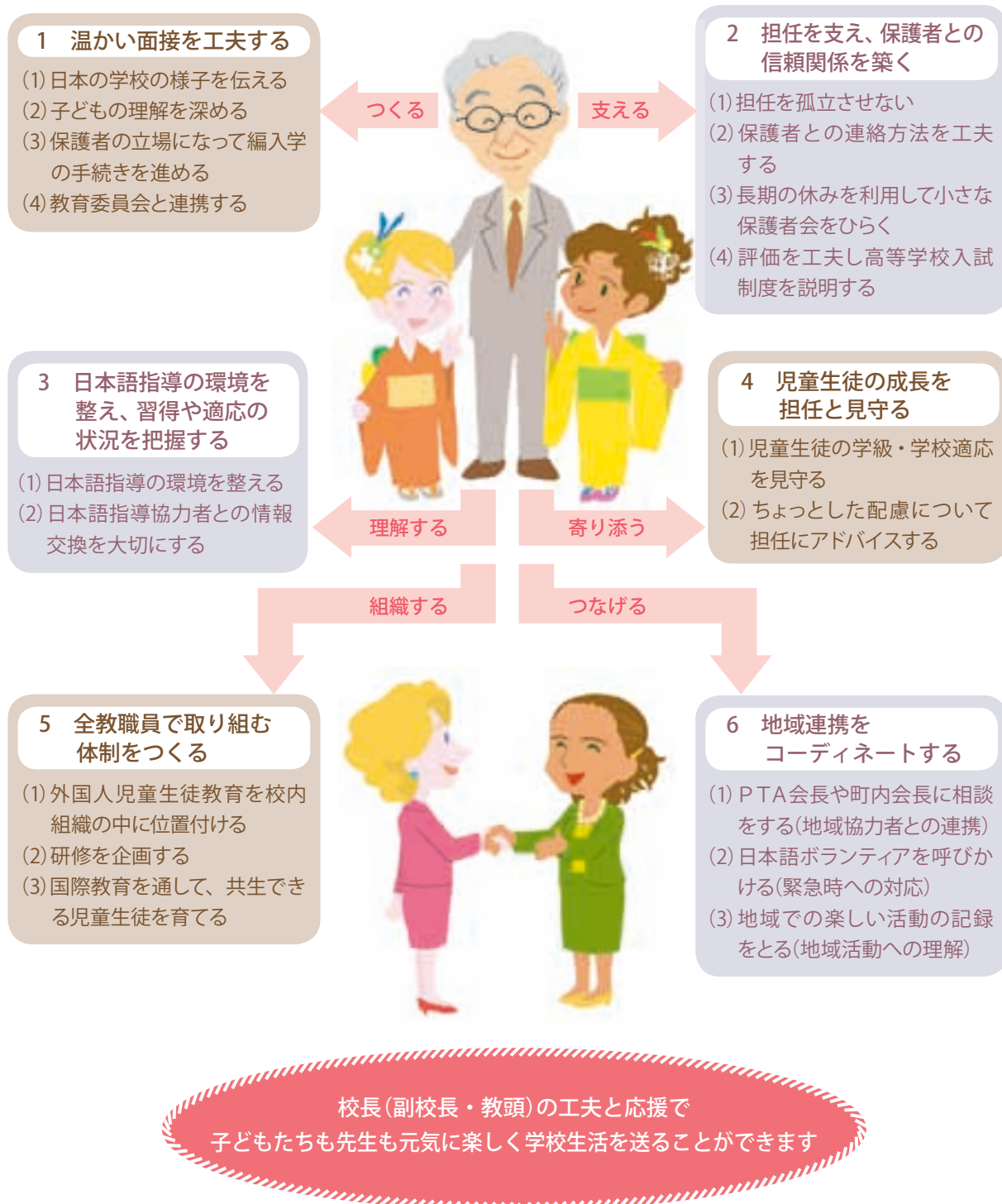


図2：外国人児童生徒が学校に編入学する際の管理職の対応

校長(副校長・教頭)には、外国人児童生徒教育に対して明確なビジョンを持ち、温かく受け入れ、日本語指導、学校生活への適応指導、校内体制、研修、地域との連携などにおいて、リーダーシップを発揮していくことが求められます。

ここでは、校長(副校長・教頭)が、学校や地域における具体的な場面で、人とのかかわりを大切にしながら、外国人児童生徒教育をどのように推進していくかを考えます。

1 温かい面接を工夫する

事前の準備と丁寧な対応が必要です。

保護者や児童生徒を安心させる面接をつくり出すのは校長(副校長・教頭)です。



(1) 日本の学校の様子を伝える

編入学の面接では、保護者も児童生徒も不安な気持ちで一杯です。言葉だけの説明では十分に伝わらないことが多く、さらに不安を招いてしまうことがあります。面接では、温かい雰囲気をつくることが重要です。

学校では行事のたびに記録をとっていると思います。それらを編集して「学校紹介用のビデオ」を作成してお

く方法が考えられます。それを見ることで、日本の学校生活の流れや日本の児童生徒の様子などを具体的にイメージすることができ、未知の学校生活への不安を解消することができます。

また、このビデオは、外国人児童生徒だけではなく、一般の児童生徒の転入学の面接、PTAや来客の方への学校紹介にも活用できます。視聴覚担当と協力してぜひ作成してみてください。また、大型液晶TVを校長室などに設置してあると活用の幅が広がります。

(2) 児童生徒の理解を深める

都道府県・市町村によっては、教育委員会に相談窓口があり、担当者が各学校と役所との連絡を進め、編入学の面接の際に、外部の支援者である日本語指導協力者などを派遣する場合があります。しかし、直接、各学校が面接をしなければならないこともあります。

面接に向けては、まず、児童生徒、家族について把握すべき内容を確認して生徒指導個票(相談カード)などを作成しておくことが効果的です。現在、各都道府県・市町村で相談カードの様式をホームページに掲載しているところもありますので、それを活用することも有効です。

また、面接の際には、①日本語の習得状況、②来日前の就学状況、③日本での滞在予定と高等学校などの進路希望、④保護者の勤務内容と連絡方法、⑤配慮事項(宗教、習慣、食べ物、アレルギーなど)などについて確認しておきましょう。

外国人児童生徒の編入学の面接は、校長が中心になって進めましょう。その際に、学級担任や養護教諭の同席も重要です。各教職員が一緒になって児童生徒一人一人の理解に努めることができます。

(3) 保護者の立場になって編入学の手続きを進める

就学の手続きや銀行口座開設など、外国人保護者には不安なことがたくさんあります。また、漢字圏出身でない外国人保護者にとっては、漢字だけの書類は不安を増長させますので、手続きの用紙を事前に学校で用意しておくとう便利です。面接しながら書類を記入し、あとは学校から役所や銀行に連絡をとっておくことで、円滑に手続きが進みます。また、体育着等の準備のため、地域のお店を紹介するとよいでしょう。その際には、地図(ローマ字表記)があると便利です。近くなら面接終了後にお店まで案内することも不安要因を減らすことにつながります。また、日頃より地域との連携を深めておくことで、面接の際に通訳ボランティアとして協力を依頼することもできます。

(4) 教育委員会と連携する

外部の支援者である日本語指導協力者などの派遣方法は、各都道府県・市町村によって異なります。日本語指導が必要な場合は、面接が終了後、速やかに教育委員会に連絡して、日本語指導協力者の派遣を依頼しましょう。校長が児童生徒の様子を教育委員会に詳しく説明することで、日本語指導協力者の人選も円滑に進められます。日本語指導のために特別に国際教室や日本語教室などが設置されている学校では、教育委員会に連絡し、担当者と受入れの準備を進めます。

2 担任を支え、保護者との信頼関係を築く

担任を孤立させずに、チームの中心になって、保護者との関係をつくり出すのは校長です。

手紙にルビを振ると保護者が辞書を使って内容を理解することができるそうだが、〇〇さんの保護者は、どうなのかな…

毎日、ルビ振りの手紙を作成して渡しているのですが、最近〇〇さんの家からの提出物が…

〇〇さんの国では、保護者会がないと日本語指導担当の□□さんがおっしゃっていたな…

それから、校長先生、〇〇さんの保護者は、前回の保護者会もお仕事の関係で欠席でした。



(1) 担任を孤立させない

担任に日常的に声かけをして、悩みを聞いたり、一緒に考え行動したりすることは管理職として重要な役割です。特に、初めて外国人児童生徒を受け持つ担任にとって、管理職と一緒に考え行動することは大きな支えになります。保護者への連絡なども、言葉の壁や文化的な違いがあるために、担任だけでは対応が難しい面があります。そのような場合には、管理職が中心になってチームとして保護者と温かい関係をつくるのが大切です。

(2) 保護者との連絡方法を工夫する

保護者に連絡する際には、すべてのお知らせや手紙にルビ振りをすることが理想ですが、難しい面もあります。また、保護者にとっては、どのお知らせや手紙が大事なかが分からないこともあります。そこで、健康安全に関するもの、学年だよりなどの重要なお知らせには赤ペンで丸をつけたり、母語で「重要」と書いたりする工夫をするとよいでしょう。保護者と相談をして、重要なお知らせはFAXで送信したり、簡単なメモを書いて渡したりする方法を行っている実践例もあります。また、現在、各都道府県・市町村で多言語によるお知らせの様式を作成し、ホームページに掲載しているところもありますので、それをダウンロードして集めて活用することも有効です。各都道府県・市町村が作成しているお知らせの様式については、文部科学省の情報検索サイト「かすたねっと」(<http://www.casta-net.jp>)をご覧ください。

学校に派遣される日本語指導協力者などに連絡を依頼することも考えられますが、すべての連絡をお願いすることはできません。そのため、日本語ですぐに連絡をとれる方を、保護者の友人や親戚の中から探すことも学校生活を過ごす上では重要なポイントです。児童生徒の安全や健康を守る学校教育の方針をしっかりと伝えれば保護者も協力してくれます。いずれの場合も保護者とよく相談をして、より良い連絡方法を考えていきましょう。

(3) 長期の休みを利用して小さな保護者を開く

保護者の出身国によっては、保護者が学校に行く習慣自体があまりなかったりすることも考えられます。外国人児童生徒が多く在籍する学校では「外国人保護者会」などがあり充実した活動をしている実践例もあります。

しかし、多くの学校では、外国人保護者会を独自で行うことは難しい実態があります。そこで、夏休みなどを活用して、保護者に学校に来ていただき、ゆっくり話をする機会をもってみてください。その際は、管理職、学年主任、学級担任、養護教員、日本語指導協力者、地域のボランティアなど、かかわりのある者ができるだけ集まって話し合うことが大切です。多くの関係者が一緒に子どもの教育を考えていることを保護者に知ってもらい、お互い協力していく雰囲気をつくるのが管理職の役割として大切です。また、保護者自身が日本での生活にストレスを抱えている場合には、結果を急ぐのではなく、相談に乗り、気持ちを理解することが大切です。定期的に行うことで、話し合いにも笑顔が生まれ、文化的な違いをお互いに確認できたり、子どもの努力を伝えられたりできる良い機会となります。何か問題が起きてから保護者会を開くのではなく、より良い関係をつくっていくために、小規模でも保護者会を継続して開いていきましょう。

(4) 評価を工夫し高等学校入試制度を説明する

学習評価についても、管理職がしっかり考え方を示す必要があります。学習評価については、一般の児童生徒と同じように目標に準拠した評価を行うことが基本です。ただ、日本の学校に編入学してきたばかりで初期の日本語を習得している児童生徒にとって、学習するための言語を理解しなければならない教科等を学ぶことは、とても難しいものです。そのため、公正な評価を行うとともに本人の努力を認める評価の工夫を行うことが重要です。例えば、

- 通知票に関しては文章表記を中心に、評価できる教科のみについて記述する。
- 日本語指導の記録を作成して通知票と一緒に渡す。
- 教科によっては母語での解答を認め、それを評価する。
- 中学生では、定期試験などでルビを振ったり、個別で通訳を配置したりする。

などの配慮が考えられます。日本語ができないから評価もできないという考えではなく、日本語ができなければどのような方法でその子の良さや学力を評価できるかを考えていくことが大切です。そのことは同時に、一般の児童生徒を評価する時の指導の工夫にもつながります。

さらに、中学生には進路指導が重要ですので、評価とともに高等学校入試の制度についても丁寧に説明する必要があります。中学1年生からでも、入試制度や入試条件を保護者に理解してもらうことが重要です。国によっては、いわゆる落第が制度として位置付けられ、運用されているケースもあり、保護者の多くは日本の教育制度についての理解が不十分です。きちんと説明をしないと、中学3年生になって保護者から「この成績なら、どうして2年生の時に落第をさせなかったのか」という質問を受けることもあります。また、各都道府県教育委員会、NPOやボランティア団体などが開催し、高校入試などについて説明を行う進路説明会などへの参加を呼びかけてみることも大切です。説明会で、高校に通う同じ国出身の先輩の努力した話や成功体験などを聞いて、安心感や目標を持つことができた実践例もあります。

3 日本語指導の環境を整え、習得や適応の状況を把握する

日本語指導の様子を参観することで、児童生徒の自然な姿を理解し、日本語指導協力者との関係も円滑になります。



(1) 日本語指導の環境を整える

急に編入学してきた外国人児童生徒に対して日本語指導を行う際に、学校によっては通常の教室に余裕がないため、教材室や放送室の控室などで日本語指導が行われていることがあります。当初は、仕方がない面もありますが、児童生徒と日本語指導協力者が落ち着いて、安心して学べる教室環境を整えることは管理職の重要な役割です。仮に教材室や放送室の控室などで行わなくてはならない場合でも、整理をして教育上支障のない環境を整えることが大切です。学習を積み重ねる中で、児童生徒の学習に必要なカレンダー、時間割、50音表、ホワイトボード、作品などの掲示物を貼れるスペースも整えてください。

(2) 日本語指導協力者との情報交換を大切にする

地域によっては、学校での外国人児童生徒に対する日本語指導のために、学校外の人材に協力をお願いしているケースもあります。日本語指導協力者と情報交換を行い、一緒により良い支援を考えていきましょう。日本語指導協力者は、児童生徒の母語だけでなく、母国の学校の様子や文化を知っている場合もあります。そのため、児童生徒は短時間で協力者に心を開き、信頼関係を築くことが可能です。一方、協力者が担当する時間や期間は極めて限られており、児童生徒の学校生活のごく一部しか知ることはできません。教科等や学校・学年行事なども含め、児童生徒の日々の状況を協力者に伝えることで、より効果的に支援することができます。協力者を通して、児童生徒の心のつぶやきなどを知ることは、学級担任へのアドバイスにも役立ちます。特に、副校長・教頭は、協力者の勤務などに関する事務処理も行うことが多く、このような関係をつくるパイプ役となります。

また、協力者を全職員に紹介をして、学校要覧などにも職員として名前を入れている学校があります。ちょっとした管理職の配慮ですが、指導をしている協力者にとっては温かく受け入れてくれたと思うことが多いようです。

4 児童生徒の成長を担任と見守る

学級や校内での児童生徒の適応状況を見つめ、
「おや?」と感じたことをすぐ教職員に呼びかけていきましょう。
校長のリーダーシップのもと、早期対応が大切です。



(1) 児童生徒の学級・学校適応を見守る

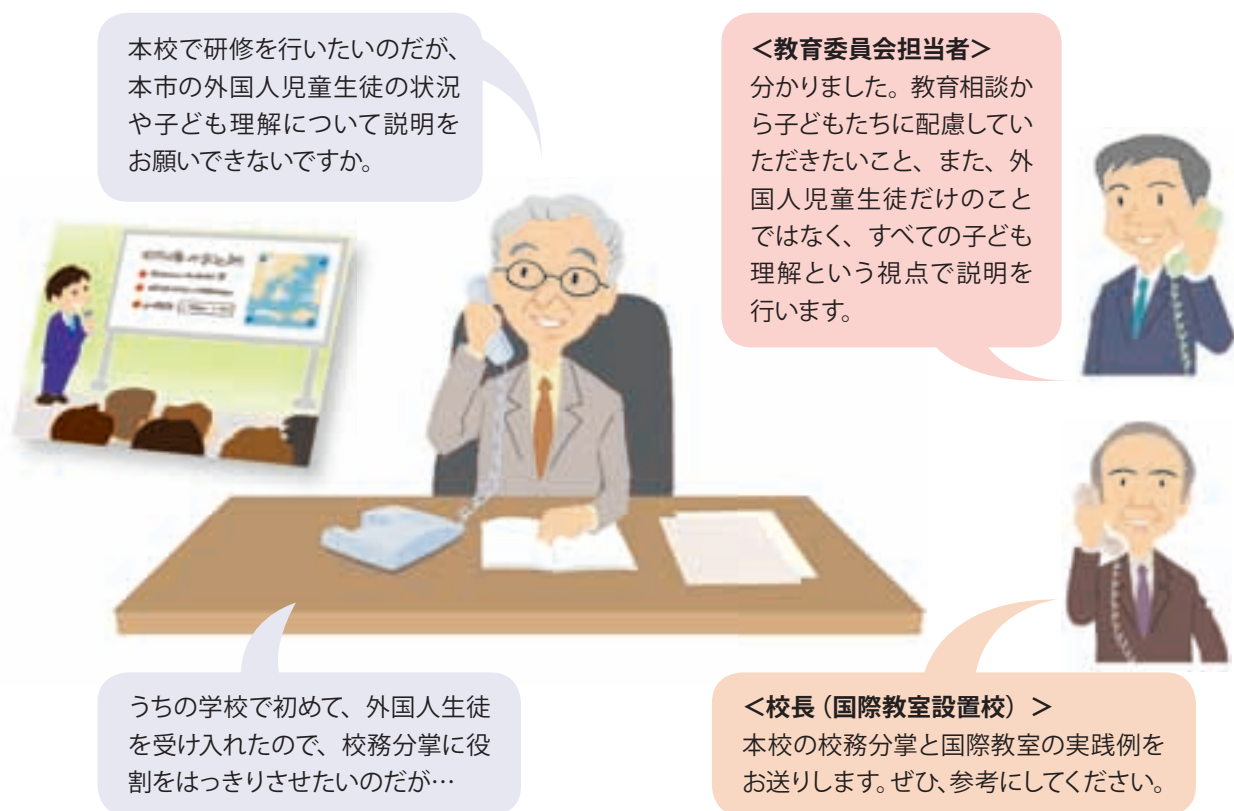
外国人児童生徒は、日本語が分からない状態では、大きな精神的不安やストレスを感じています。朝などの時間に、児童生徒の様子や安全を確認するため、管理職が校内巡視をする際に、外国人児童生徒が在籍している学級の様子は丁寧に観察して、本人にも積極的に声かけをしたいものです。編入学当初の緊張した状態から少し学校に慣れてきた頃に、やや元気がなくなってしまうことがあります。児童生徒の様子で「おや?」と感じたことは学校に巡回指導にくるスクールカウンセラーなどに相談を依頼することも考えられます。スクールカウンセラーのアドバイスを受けて、校長が呼びかけ、全教職員で片言の外国語であいさつや声かけを積極的に行った実践例があります。日本語でも「おはよう」「げんき?」「がんばっている?」など簡単な言葉でみんなが応援する姿勢を示すことが児童生徒に大きな勇気を与えます。短い時間でこのような全教職員の取組を行うためには、やはり管理職のリーダーシップが不可欠です。

(2) ちょっとした配慮について担任にアドバイスする

教室の前には、その学級の児童生徒の作品が掲示されています。校内巡視の際に、外国人児童生徒の作品がどのように掲示されているかを見てみましょう。母語で作文が書かれたあとに日本語指導の協力者が日本語の翻訳をつけている場合があります。ちょっとした配慮のあるなしでその子が受ける印象が違ってくるはずです。また、学級通信で編入学したばかりの外国人児童生徒の母語の作文(日本語訳つき)を紹介する実践例もあります。言葉が分からないからこそ配慮してあげたいことを管理職の視点から担任にアドバイスしてください。

5 全教職員で取り組む体制をつくる

校長が学校目標に沿って情報を集め、
外国人児童生徒教育についてビジョンを示すことが求められます。



(1) 外国人児童生徒教育を校内組織の中に位置付ける

外国人児童生徒が多く在籍し、日本語指導などのための特別な教室(国際教室・日本語教室など)が設置されている学校では、その教室の担当者がコーディネーターとして校内・校外において役割を担うことが重要です。校務分掌に位置付けるとともに先進的な実践例などを参考にして、管理職が年間を通した役割(学級担任との日常的な指導連絡方法、学校適応のための会議、外国人保護者会、日本語指導の記録など)をリーダーシップのもとに示していくことがその教室のより良い運営につながります。

外国人児童生徒が1～3名程度の学校でも、国際理解教育担当者などを配置している実践例もあります。しかし、多くの学校では、新しい担当者を配置できないことも考えられます。そのような時でも、他の関連する教育の分掌の中にしっかり役割を明記して校内組織の中に外国人児童生徒教育を目に見える形にしていき、全教職員が意識できるようにすることが大切です。

(2) 研修を企画する

外国人児童生徒教育については、担任が基本的な知識や経験がないために、どう指導してよいかわからないという不安を感じてしまうことがあります。そのような不安を解消していくためには、研修が重要です。外国人児童生徒教育の充実は、単に外国人児童生徒だけではなく、すべての児童生徒にとって分かりやすい授業、安心して過ごせる学級・学校づくりにつながることを、管理職が全教職員に明確に伝えることが重要です。

研修を考える時は、まずどのような研修を計画するとよいか情報を集めましょう。同じ市町村の外国人児童生徒の受入れ経験豊富な学校や国際教室などのある学校、教育委員会の担当者、国際交流協会、地域のNPOなどから情報を集めてください。講師の選出については、地域や受け入れた児童生徒とのつながりなどから考えていきましょう。例えば、直接日本語指導をしている協力者、地域で外国人の支援をしている方、多くの児童生徒を受け入れている近隣の学校の教職員あるいは管理職、地域で働く同じ出身国の市民、教育委員会の教育相談などの担当者などが考えられます。継続的に研修ができる場合には、教職員だけではなくPTAの方に参加を呼びかけることも考えられます。地域で暮らす一員ですのでPTAの方にも協力していただけるきっかけになる研修を考えたいものです。また、ワークショップなども取り入れながら、学級担任同士がお互いに悩みを共有したり、解決方法を考えたりできるように工夫したいものです。

【こんな研修テーマや講師が考えられます】

- | | |
|-------------------------|-------------|
| ○外国につながる児童生徒の受入れで大切なこと | (国際教室設置校校長) |
| ○外国人市民として〇〇市に生活してみて | (外国人市民) |
| ○外国につながる子どもと家族 | (教育委員会相談担当) |
| ○すべての児童生徒にとって安心できる学級づくり | (大学教授 心理学) |
| ○中学生から編入する外国人生徒の進路について | (教育委員会高校担当) |
| ○外国人社員と一緒に働く | (地域の会社 社長) |

(3)国際理解教育を通して、共生できる児童生徒を育てる

国際理解教育では、単に他国の文化を理解するだけにとどまらず、自分の隣の友達として他者を理解して、相互に助け合い、時には葛藤しながらも認める態度・能力を育むことが求められます。その実践を行うことで、日本の児童生徒にとっても、外国人児童生徒にとってもお互いに異なる文化を持つ友達を受容し共生する学級・学校づくりを進めることにもつながります。

【こんな実践が考えられます】

- 友達との話し合いや意見をまとめる活動を重視する。うまくまとまらない経験を通して感じたことを振り返る。話し合ったあとの自分の考えの変化を振り返る。(すべての教科等)
- 地域で生活している外国人留学生との交流を通して、外国人市民が日本で生活することについて考える。(総合的な学習の時間)
- 作品鑑賞などを通して、自分の感じ方を根拠をもって話し、友達の感じ方と比べる。(音楽科、図工・美術科)

校務分掌、研修、国際理解教育いずれの取組においても、管理職が、学校目標に沿って、外国人児童生徒教育の明確なビジョンを示すことが求められます。

6 地域連携をコーディネートする

学校生活を楽しく充実したものにするためには、校外での生活にも気を配ることが必要です。
地域との連携協力は校長の重要な役割です。

PTA会長の協力で〇〇さんも、
友達と一緒に地域行事にも参加で
きるようになりました。相談して本
当によかったですよ。

地域のまとめ役の方がいましてね。
彼女に相談したら浴衣まで用意して
くれました。娘さんが着ていたもの
らしいですよ。



(1) PTA会長や町内会長に相談をする(地域協力者との連携)

学校を支えている地域には、PTA関係者や町内会長をはじめ、子ども会の役員など、協力を依頼できる人材が豊富です。特に、町内会役員の中にはとても親切な方が多くいます。「今度うちの学校に、〇〇の国から子どもが編入学しました。地域行事に参加させたいのですが…」という校長の一言から、取組は急速に進展します。もちろん、頼むだけでは不十分です。管理職は地域の行事に出向き、様子を見ながら継続的な連携を考えていくことも必要です。地域に馴染み、地域で友達と活動できるようになれば、学校生活への適応も日本語の習得も、そして自分を表現する力も飛躍的に伸びていきます。

(2) 日本語ボランティアを呼びかける(緊急時への対応)

教育委員会から派遣される日本語指導協力者だけでは、緊急事態に対応できない場合もあります。地域の方との連携で、緊急連絡時の通訳も兼ねた日本語ボランティアも発掘できます。日頃より地域の方との連携を心がけている管理職の情報収集が重要です。学級担任からの「〇〇語を話せる方、町内にいませんか?」という質問に対して、「たしか、2丁目に同じ国から来た人が住んでいたと思いますよ。」などとアドバイスするなど、校長の人材発掘力も頼りにされているのです。

(3) 地域での楽しい活動の記録をとる(地域活動への理解)

学校紹介用のビデオとして、地域行事での児童生徒の様子を記録にとっておくことも効果的です。「学校のことはよく分かりましたが、地域ではどのような行事が行われていますか?」と質問するなど、保護者の不安は学校についてだけではありません。楽しい地域の行事を面接の時などに紹介することで、この町に暮らし、学校に通う期待感を膨らませることができるはずです。